

賢伝教説話がみられる。田坂興道『中国における回教の伝来とその弘通』一九六四、一七八頁以下参照。

(5) シャンロが利用した研究業績に、クチャーノフの『タングート 国史略説』がある (E. M. Karanov: Очерк истории Танытского государства, Москва. 1968. 書評『東洋史研究』二八一・二・三、西田竜雄執筆)

(6) 西田竜雄は「西夏族(タングート族―筆者注)の子孫は今でも、甘肅省一帯に何らかの形で生存していることと
思う。」(『西夏文字―その解説のプロセス』、一九六七、四二頁)と述べているが、イスラム化したことも十分考えられる。

(7) 今永清二「中国イスラムにおけるスーフイズムに関する一考察」『広島大学文学部紀要(東洋)』三二―一、一九七三、参照。

(8) 門宦研究は中田吉信によってはじめられている。中田前掲書「4『新教』と門宦制度」、同「中国イスラム史上におけるスーフイズムの役割について」、『イスラム化』にかんする共同研究報告」5、一九七二、同「四川回民雑考」『山本博士還暦記念東洋史論叢』所収、一九七二。尚、中国のスーフィー教団をはじめてあつた研究に小野忍「中国に於ける回教教団」『東亞論叢』第六輯、一九四八があるが、歴史的考察が不十分である。

批評と紹介 辻

『ヴァーラーハ・グリヒア・

ストーラ』のフランス語訳注

辻 直四郎

現在すでに十六種のグリヒア・ストーラ(家庭的儀典の綱要書、GS)が出版され、その中の約三分の二は英語或いはドイツ語に翻訳されているが、フランス語に完訳されたのはヴァーラーハ・グリヒア・ストーラ(VGS)をもって最初とする。今から約三十年以前、M. J. Dresden はマーナヴァ・グリヒア・ストーラ(MGS)を、豊富な注釈を添えて英訳し(Groningen, Batavia 1941) VGS の比較研究に貢献した。今 P. Rolland 博士はその姉妹書 VGS を、従来の研究成果の上に立って平明に翻訳し、(G. 52-143)、適切な文献学的注釈 (p. 149-179) を施して理解を助け、GS の翻訳書群を一層充実させるにいたった。かつ本書には Reghu Vira 出版の原典 (Lahore 1930) が写真によって複製され、若干の改訂が添えられて、訳文に對面するページに印刷されているから利用者は一々出版書を開く勞に煩わされない。

ヴァーラーハ派がマーナヴァ派と共にマイトラーヤニーヤ派に属し、マイトラーヤニー・サンヒターを所依の聖典とすることは周知の事実である。VGS は十七章 (kanda) からなり、二十七種のパreshineta (拾遺文献) の列挙に始まり

(1. 1)⁽²⁾ パーカ・ヤジマニヤ(調理された供物を捧げる祭儀)を規定したのも、他の GS. と異なって誕生の儀典 (Janakar-man) を冒頭に置き、妊婦の頭髪に分目を作る儀典 (siman-tonnayana) に当たる一聯の家庭的儀典 (sahskata) を収め (II-XVI)、「一切神への献供 (visvedevakarmān, XVII) を終えている。この内容から明らかなるよう、VGS. は普通の GS. よりむしろ長く短く。しかし他面において類書で見られる要素 (e.g. XIII. pravayana 「告知」) を含むことから注目し得る。なお内容は訳者の序文 p. 20-31 に簡明に要約されている。

VGS. が MGS. と密接な関係にあることはすでに述べたが、VGS. は時にカータカ・グリヒヤ・スートラ (KGS.) と一致することがあり、これら三種の GS. は共通点によって結ばれた一群をなしている。三者の対応は詳しく注釈中を示されているほか、簡便な一覧表に収められているから (p. 191-198) 今後の比較研究に貴重な資料を提供する。また訳者は VGS. の言語と MGS. のそれとの類似点を指摘し、少くも VGS. が語形を正規化する傾向を認めつつ (e.g. dharaṇet: MGS. dharaṇya) 両者の年代の後先を決定するには足りなかつた (p. 49-50)。訳者はその KGS. を加えてこの三者に関しても、決定的証拠を欠くことを理由に、年代の後先についての明答を控えている (p. 34-36)。このほか序文に

含まれる VGS. 中の神格の列挙ならびに解説 (p. 37-38) は従来あまり研究されなかつた GS. の神話の攻究のために有益な材料を提供するものと考ええる。

翻訳が明快で GS. の内容をよく伝えていることは専門家の以外の通読に堪えるものとして称讃に値する。ことに原典が冒頭の数語 (pratika) によって引用する聖句 (mantra) の全文を訳出していることは感謝に値する。原典に従って冒頭のみを訳しても儀典の行為との関連は明瞭にされないからである。なお VGS. 中に引用されているイントラについては p. 32-33; p. 183-189 参照。最後に巻末の諸索引が本書の利用価値を高めていることを言い添えておく。

附記 VGS. と MGS. とは酷似する部分が多いとはいへ細部においては相違する点が少ない。GS. の比較研究は、両書の勝れた翻訳を得た今日においても、多くの問題を抱えている。次に結婚に関する最初の一章を例とする。

VGS. X. 8. anganikam: MGS. I. 7.8. nagnikam, cf. Dresden ad loc., Roland ad loc. 恐らく前者の読方が勝つと思われぬ。

VGS. X. 9: MGS. I. 7. 9. 占うに用いる土塊の数、前者によれば四個、後者によれば八個、また KGS. XIV. 5. に従えば九個である。

VGS. X. 12 = MGS. I. 7. 12: satam itrahām, "a hundred

